



カンナミのおじさん

もりひろ



神奈川県足柄下郡真鶴町で生まれ育った私には、神奈川県西部から静岡県東部に住む親戚が多い。特に神奈川県の小田原市と南足柄市、静岡県の沼津市あたりには親戚が密集している。

十八歳で実家を出るまで祖父と一緒に暮らしていた。いわゆる、「本家」というやつだ。祖父が存命だった頃は、盆や正月に多くの親戚が集まって来ていた。

あんまりに多くの親戚が集まるから、どれが誰だか整理するのに骨を折った。祖父を起点にして、関係性を一個ずつ整理するのだ。私が苦勞して親族の顔と名前を思い出そうとしているにも関わらず、向こうは私のことを赤ん坊のころから知っているふうのことを言う。

祖父を中心とした強い結びつきにより頻繁に集まっていた親戚の中に、一度しか会ったことがない人がいた。

カンナミのおじさん、と呼んでいる人だ。私が五歳の頃に祖母の葬儀で会ったきりだ。賑やかな親戚たちの中にポツンと佇み、誰とも話さずにいた。その姿がちよっと寂しそうだったので、話しかけたのを覚えている。

どの親戚も、それぞれの会話を聞いていれば「この人は祖父の妹の旦那さんの弟の……」という具合に辿ることができた。しかし、カンナミのおじさんだけは誰の会話からも辿ることができなかった。

あの時、彼は自分から「カンナミのおじさんだよ」と言った。確か、私は「大きくなったらおじちゃんと結婚する」という旨のことを言ったような気がする。



私が進学を機に実家を出て大阪で一人暮らしをし始めると、段ボールで物品が届くようになった。年に数回、ミカンやスイカ、イチゴなどの函南産の農産物が届いていた。時折、クール便で丹那牛乳が届くこともあった。

依頼主の欄に『カンナミのおじさん』と記載されていた。本名を書かなくても荷物が送れることに感心したのを覚えている。おじさんの本名を知らないことを不思議に思ったくせに、すぐにも良くなかった。

お礼に、大阪の土産品を送った。それ以来、カンナミのおじさんからの荷物は頻度を増し、農産物以外も届くようになった。母から年に一回くらい届く仕送りよりも中身が充実していた。貧乏な学生生活を無事に乗り越えることができたのも、カンナミのおじさんのおかげだ。

就職をして大阪から神戸へ移り住んだのちも滞ることなく届き続けた。住所が変わった旨を伝えた覚えはなかったけれど、きつと母が教えたのだろう。

三十路を過ぎた今でも、カンナミのおじさんからの仕送りは届く。今では、月に一回のペースで届いている。おかげで、食べ物には困っていない。



祖父が亡くなった。大往生だったもので、みんな笑顔で祖父を送り出すことができ、葬儀なのに賑やかだった。

私としては実家を出て以来、およそ十五年ぶりの親戚の集まりだった。

もちろん、カンナミのおじさんの姿はなかった。時々、申し訳程度にお返しを送っていたけれど、直接お礼を言ったことはなかった。

今日、葬儀に来ていれば直接お礼がしたかった。

私はあまりに気になっていたので、母に尋ねてみた。

「カンナミのおじさん、今日も来てないね」

「カンナミのおじさん？ 誰のこと言ってるの？」

「カンナミのおじさんはカンナミのおじさんだよ。十八の時からずっと、仕送りもらってるし、お礼が言いたいんだけど」

「うちには函南町に親戚はないはずだけど」

私は、頭から雷を落とされたようだった。

カンナミのおじさんなんていないなら、一体、誰があの荷物を送って来ているのだろうか。私が送り返した荷物は、誰が受け取ったのだろう。私のこどもの頃の記憶は、何だったのだろうか。カンナミのおじさんは、なんで祖母の葬儀に来ていたのだろうか。



葬儀を終え、私は神戸へ帰る新幹線へは乗らずに函南町へ向かった。私は、カンナミのおじさん宅へ向かうことにしたのだ。

私は、十五年に渡り眺めていた住所を覚えてしまっていた。

函南駅でタクシーを呼び、ドライバーへ住所を告げて向かってもらった。

みるみる森が深まる。道幅が狭まり、未舗装になった。落石もある。

「お客さん、すみませんね。倒木があつて、ここから先は行けませんね」

仕方なくタクシーを降り、ナビに従って歩いた。曰く、もうそんなに遠くはないらしい。

長らく誰も通らなかつたであろう道を辿って、ナビが示した場所に着いた。木々が生い茂る山の中で、家なんてどこにもない。

あるのは、小さな祠だけ。長きに渡って手入れがなされていないらしく、朽ち果てていた。

ここに来たって、何もわからなかった。カンナミのおじさんが誰で、どこに住んでいて、なぜ祖母の葬儀に来ていたのか、答えはおろかヒントになるものもない。

私が訝しく思っていると、スマートフォンに通知が来た。

『配達のお知らせ。ご依頼主名…カンナミのおじさん、ご依頼主住所…静岡県田方郡函南町×××、品名…婚姻届』

祠の向こうで、誰かが動いた気がした。

△了▽

カンナミのおじさん

2023 年 10 月 28 日 発行

著者 もり ひろ

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関する事柄を担います。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし、

祖母の葬儀で一度だけ
会ったことのある「カン
ナミのおじさん」と呼ん
でいた人。年に数回、函
南の名産品を送ってくれ
る。本名も知らないその
人に会うために私は函南
に向かったが……。

